

和歌山県立

もん じょ かん

# 文書館だより

第50号 平成29年11月



御元服後 五節句御服 御髪 御守殿長つと御下げ髪 御介取 菊綸子縫入 御相召 緋の大紋  
 「南紀徳川史」巻 149 (東京大学史料編纂所蔵謄写本より)

描かれた 紀州藩大奥の装い その二 (季節を纏う)

武家の年中行事は様々で、元日の年賀にはじまり、年末の煤払いに至るまで、いくつもの行事が定められていました。

紀州藩でも、元日には「年頭御式」が行われ、それに続く若菜の祝い、端午の節句、七夕などといった五節句や、毎月朔日(一日)・十五日・二十八日の式日、嘉祥や亥猪、中間など、細かな行事の定めがありました。

紀州藩大奥では、これらの「御式」に合わせ、御簾中や奥女中たちは、その日その日にふさわしい様々な装いで、祝いの儀式に臨みました。

これらの衣装は、堀内信によって、「南紀徳川史」にあざやかな色彩をもって描

かれました。「文書館だより47号」の正月の祝賀式の装いに続き、「午後の御召替」や「五節句」「式日」の衣装を、印刷本では失われてしまった彩色とともに、

東京大学史料編纂所蔵の謄写本「南紀徳川史」より御紹介いたします。

まず「節句」といえば、今の私たちになじみの深い三月三日の「桃の節句」や五月五日「端午の節句」、それに七月七日の「七夕」などがすぐに思いつきます。

これに若菜(一月七日)と重陽(九月九日)を加えて「五節句」といいます。

紀州藩大奥でも五節句には、それぞれの日にちなんだ飾り物や供え物をして、子供の成長や健康、長寿を願いました。



写真1 元服前、式日御服「唐団扇菊ちらし」模様の打掛 (表紙と写真1~10は東京大学史料編纂所蔵謄写本より掲載)

その日の御簾中(藩主の正室)の装いが、「大奥御服図」に描かれています。

表紙の写真は、五節句(元服後)の装い、写真1は式日(元服前)の装いです。

御介取(打掛)

正月の御祝式は、萌黄色の柱に緋の袴姿でしたが、午後になると御介取(御挿取)姿に御召替えとなりました。また五節句・式日なども、御介取、いわゆる打掛です。正月の伝統儀式に着用した公家風とは打って変わって、いかにも武家風の装いです。現代では和装の花嫁姿として定着しています。

打掛は文字通り「打ち掛けて着る着物」で、帯を締め上から羽織って、上着として着用します。着物の丈をそのまま生かして着るので、身の丈より余った裾は後ろに広がり、優雅な曲線をつくり出しました。打掛には、洗練された様々な美しい模様が描かれています。

表紙の打掛には着物全体に雲形が施され、そこに菊や、梅、蕙、葵などが浮かぶように、すき間なくちりばめられています。菊は長寿を象徴する花、梅は厳しい寒さのいち早く咲き初めることから生命力や忍耐力を表し、蕙はつるが伸びて葉をつけることから発展を意味します。雲形は紫色で彩色されているようにみえるので、めでたいことが起こる前兆に現れるという瑞雲を表しているのかもしれない。このような縁起の良い文様を吉祥文様と言い、この模様を何種類も組み合わせた打掛は、最上級の祝意を表しているということができるでしょう。また写真1の「式日」(元服前)に着

用するとされる打掛では、柄の端の穴にひもを通した唐団扇や菊が描かれています。唐団扇は軍配団扇ともよばれ、軍陣での采配、相撲の行司が使用する軍配を形取っている事から、力強い勝利の象徴とされています。また団扇には邪気をはらう意味もありました。

これらの模様は「縫い入れ(刺繍)」で施されました。色とりどりの刺繍糸に加え金糸や箔なども使われ、華やかな打掛であったことが想像できます。

菊や梅、雲形、唐団扇などのほかに、桜、藤、牡丹、杜若、鳥、立棒など様々な模様があり、それぞれに健康や長寿などを表す意味が込められていました。吉祥文様は五節句の祝意を表すのに相応しい文様といえます。

御簾中が着用する打掛の模様は数百種もあり一々「枚挙すべからず」と記される程でした。

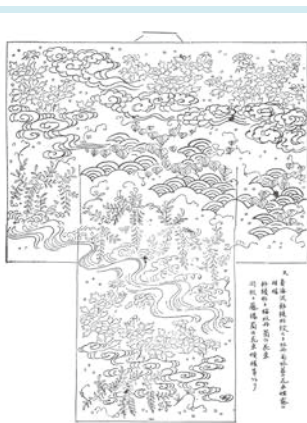


図1 菊縷子地白・地赤・地黒御簾中模様 「青海波・せいがいは・沙綾形(さやがた)・段々ル牡丹・菊・杜若の花束・蝶・露の模様」の図案(元服前) (図1~4は清文堂出版「南紀徳川史」より掲載)

元服前と半元服の期間は振袖、元服が済むと袖を短くした留袖を着用しました。

次に、打掛の生地ですが、「菊綸子」とあります。綸子とは、縺子織（サテン）の一種で、薄地で柔らかく、滑らかな光沢のある絹織物です。糸の取り方によって地紋ができ、それが浮き出してみえるのが特徴です。



図2 菊と蘭の地紋



図3 沙綾形（直線的な部分）

たもの」とあります。

卍（万字）は、吉祥のしるしとされ、これを連続紋でつないでいることから、不断長久（不断＝絶えることのない、長久＝長く続く）の文様とされており大変縁起の良い文様といえます。これもまた吉祥文様のひとつで、家の繁栄や長寿などの願が込められていたことが読み取れます。

「菊綸子は御当家に限れるよし也」とあることから、当時は徳川一族に限って着用することができた特別な文様でした。おそらく、この地模様を織り出された綸子を「御当家」では特に「菊綸子」と

同書の解説によると

「菊綸子」の地紋とは、「菊と蘭の打」に織り出し、それぞれの間を、卍を斜めに崩した沙綾形と呼ばれる連続文様でつないだ文様を織り出し

呼び慣わしていたのでしよう。五節句には「菊綸子の他は用ひがたし」として、節句の祝いには必ず菊綸子の御介取を着用していたようです。また、正月三日の日の、午後の御召替えや玄猪（十月の亥の日）など五節句に匹敵する「五節句服被召べき廉々」の祝賀行事にも着用されていました。

生地の色は地白・地赤・地黒の三種類でしたが、三月三日の桃の節句には桃色の御介取が着用されました。この時は綸子ではなく、縺子の生地に縫い入れがされたものでした。また、五月五日の端午の節句から九月九日の重陽までは、見た目にも涼しげな辻（絹縮）を着用しました。

さて、打掛の下に着用した御相召には紅白の二色がありました。

写真2 緋大紋綸子



正月の午後の御召替え後や、五節句には「緋の大紋綸子」又は「緋紋縮緬」でした。緋色の地色に大きな模様が描かれています。胴裏（裏地）には紅裏が使われていました。胴裏（裏地）には紅裏が使われていました。紅裏は、紅花によって赤色または緋色に染めた紅絹です。紅花を揉んで染めたことからモミと言う名前が付い

たようです。組色（二つ色）として白色が重ねられました。

五節句の中でも、三月三日の雛祭りや重陽の九月九日に限っては白色の大紋、同じく白の紋縮緬が着用されました。



図4 白大紋

白色の大紋の縫い入れには「色なし」とあり、赤糸は使われなかったようです。雛祭りの桃色縺子地の打掛に合わせた取り合わせなのかもしれません。

帯

帯類もまた大変多くの模様、柄、色合いの図案がのこされていました。

生地は縺子で、寸法は鯨丈で一丈一尺（約42cm）、巾八寸（約30cm）ありました。

写真3 市松紫白 牡丹花紅ぼかし 杜若紫金 縺子地



菊の花金紫ぼかし、紅ぼかし、かば糸も入、蝶黒・金・紅其外色々入、いづれも色取よく紅がち、鯨丈一丈一尺、巾八寸、織出の外

写真4 帯図案



黒地に吉祥文様の綱目紋が描かれ、桜が散りばめられた帯の模様

現在の帯の寸法に比べると一概には言えませんが、約20cmほど長く、幅は袋帯と同程度であったようです。

結び様は二通りあり、留袖となる前（出産前）は「紀州の左やの字」と称する結び方で、肩から腰にかけて斜めに蝶結びをするように結びました。

右側を上にする右矢の字と左側を上にする左矢の字があり、出かける時は左矢の字、室内で裾引きの時は右矢の字などと、諸説ありますが、紀州藩大奥では常時、左矢の字に結んでいたようです。

御簾中を初めとし、奥女中一般が、一様にこの結び方でした。



写真5 紀州の左矢の字結び



写真6 御前帯の様子

した。  
御前帯は巾3寸余(約12cmほど)の細い帯で、両端は丸くなっていました。この帯の締め方は、腰の中央で結び、両端を角のように左右に張り出させます。張り出した部分には途中で折れないように、芯を入れて補強していました。色は白、紺、赤、萌黄、紫など様々なものがありました。

留袖となった後は、結び目が前になる「御前帯」に結びました。このとき締める帯は、通常よりも少し幅が狭い六寸五分(約24~25cm)のものを使ったようです。これを御掛下(掛下帯の意)、と呼んでいました。  
御附帯、御腰巻姿 ~夏の装い~  
四月一日より重陽の前日まで、夏の間は「御附帯」と呼ばれる帯が締められます



写真7 御腰巻姿(左)と御附帯(右)

「御腰巻 武家方のみ用いるよし、夏季づし(つじ・本辻とも。御台所や御簾中などが着用)を召され御附帯へ掛け、前襟の紐を御附帯へくくり止める」と、着用の手順が示されています。



御附帯を締めている期間は、打掛は着用しません。そしてこの期間中の御節句の装いは、打掛の代わりに御腰巻という着物を腰に巻き付けた「御腰巻姿」となりました。御腰巻は御附帯の芯が入った角の部分に着物の両袖を通して掛け、前襟に付けられた紐を帯へくくり、止めるのだそうです。御腰巻姿は武家方でのみ用いられた夏の独特な正装の姿でした。  
腰巻用の着物は、絹糸を精練しないままで織った「生糸織」で、張りのある生地が使用されました。色は「嘉珍色又ハ地黒」とあり、濃い褐色か黒色で、着物全体に刺繍の入った「縫い入れ総模様」に「摺金」が施されていました。  
「摺金」は、恐らく「摺箔」のことで、生地に直接、糊や膠をぬり、その上に金箔を置いて模様を表す技法です。総縫い入れ模様の刺繍と組み合して使うことによって、夏用であっても、豪華な仕立てになっていたものと思われれます。御腰巻の寸法は「身丈に応じ少々、長短あれ共大凡左の如し」として、  
丈 四尺九寸五分(一八七、五cm)  
袖 二尺六寸(九八、五cm)  
奥身丈 四尺七寸(一七八、〇cm)  
襟 二尺六寸(九八、五cm)  
總丈五尺式寸(一九七、〇cm)  
と記されています。  
この寸法から見ると、丈が四尺九寸五分とあることから裾引きで、袖丈が二尺六寸と長いことから、振袖に仕立てられたのではないかと推測されます。

「仕立並衣の如にて短し」とありますが、通常の打掛に比べても大きい寸法で、これを御附帯に掛けて着用したのであれば、随分長く裾を引いたのではないかと思います。  
御腰巻の模様は、七宝や卍つなぎ、亀甲などの幾何学的な吉祥文様に、菊や若竹、梅立木の折枝などが描かれていたようです。  
写真8は、「巫姫様御召」の御腰巻の模様です。巫姫は十代藩主治宝の姉です。同書には、  
巫姫様御召 寛政五年十月  
(御腰巻) 地黒紅梅絶模様 七宝梅橘折枝  
とあります。  
十月に、夏用の御腰巻を仕立てるのは時期外れのようにも思われますが、巫姫は、この年の五月十八日に、松平相模守治道(鳥取藩主)へ縁組が決まっており、十一月には鳥取藩邸へ「御引移」となります。時期から推測すれば、恐らく婚禮のための仕立てであったのでしよう。

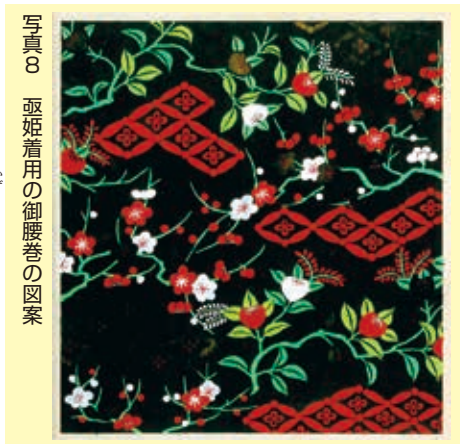


写真8 巫姫着用の御腰巻の図案

その代銀は、刺繍や摺箔が施された表の代銀が三貫五百目、これが二着と、袴の裏地となる「裏紅纒」が二反で五百目(呉服師丸屋積)と記されています。現在の価値に換算すると、一着分で見積もっても、四百万円を越す金額であったと推測されます。何着持つて行ったのか、大変気になるところですね。

「南紀徳川史」によると、前述のように紀州藩大奥では四月一日からは打掛は無しとなり、裏地のある「御袴」仕立ての着物に御附帯を締めました。そして五月五日の節句からは、「夏御召替」(衣替え)となり、裏地のない「辻」(帷子)を着用しました。

この時は、やや厚手の「縮緬」を着用しましたが、土用中は「のし辻」という薄手の縮緬が着用されました。

また、徳川家康が江戸城に入城したことで、徳川家にとっては正月に次いで重要な日とされた八朔(八月一日)には江戸城において諸大名などが「白帷子」に長袴姿で登城し將軍に拝謁しました。紀州藩大奥でも御附帯、御腰巻姿に、この日に限っては特に白色の辻が着用されました。九月に入ると、「御袴」となり、九月九日の重陽の節句から打掛を着用しました。

髪型

髪型は表紙写真の元服後の絵姿に「御守殿長づと御下髪」と書かれています。「御守殿」とは將軍の娘が高位の諸侯へ嫁した後の敬称で、また、その居住した御殿を指します。

紀州藩では貞享二年(一六八五)、三代藩主綱教が、五代將軍綱吉の娘の鶴姫

(明信院)を迎えました。また、十代藩主治宝が、天明七年(一七八七)に十代將軍家治の養女である、種姫(貞恭院)を迎えました。

女性の髪型といえ、もともとは御下げ髪が基本で、古くから公家の間では、肩のあたりで髪を束ねる下げ髪(おすべらかし)が結われてきました。これに対し、束ねた髪を頭頂に持つていき(これを根という)、背中に下げる(根結の垂髪)という結い方が武家の間で定着していきます。したがって、ここにある「御守殿」は、將軍家から嫁いで来た姫たちが結っていたような武家風の御下げ髪を意味しているものと思われま

「長づと」は、元は「葵髷」と呼ばれており、これをはじめは公家の間で広まっていたようです。それが將軍家に嫁いだ姫君などから徐々に広まり、武家の間でも定着するようになりまし

と(関西ではたば)は髪を束ねて頭頂へ持ち上げたときに見える、襟足より上の背に向かって張り出した部分です。横髪の髷と髷をまとめて頭頂部の高い位置で結うことから、髷が長く見えるので「長づと」と呼ばれたのかもしれない。

髷は、写真9のような弓のような形をした細長い髷さしに、「髷付け油を塗



写真9 御守殿長づとの髷さし

髪を付着させ、左右に張りを持たせました。

一般には針金を紙を巻き付け漆で固めたものや鯨の髭でできたものもあったようですが、ここでは「黒籠甲製」の髷さが描かれています。

表紙写真に描かれた髪型のように前髪と、横に張り出した髷と髷をあわせて頭頂で一束に結び、下げ髪にした先に、長かもじを付け足して総元結で結わえ、その下へ順々に紅白、紅、白、紅の元結を結ぶ、これが「御守殿長づと御下髪」の髪型であったと考えられます。

参殿の者御引見の節の装い

写真10は、打掛を羽織り、御合召には緋色の縮緬と、五節句・式日の装いと変わり無いように見えます。しかし、決定的に違うのは、髷の結び方です。五節句・式日など、公的な儀式のある日には、御下げ髪であることが重要でした。

しかしながら、御下げ髪は日常生活において大変不便がありました。そこで御式が終わった後の御召替え後などには、

「下げ下地」(片外し)などと称される、下げ髪を笄に巻き付けて結び上げ、必要な時に簡単に元に戻せるような髪型で過ごしました。

ここに描かれた髪型は「吹き輪」という髪型です。吹き輪は、通過儀礼のひとつである、歯を黒く染める鉄漿を済ませたものの、眉は剃らずにいる半元服の時期の平日に結われる髪型です。大名の姫君の髪型です。

平日の髪型でありながら、打掛、緋縮緬の御合召といった礼装をしているのは、参殿の者に引見するためです。

平日の髪型ではあるものの、参上の者たちに失礼にならないよう礼装を着用する、いわば平日と式日の折衷型のような装いです。大奥ならではの合理性が垣間見える着こなしといえるのではないのでしょうか。

今回は五節句・式日などに着用された装いを紹介しました。

正月の祝賀式での正装は、有職文様が描かれた伝統的な「桂」に「袴」姿ですが、五節句・式日などには、

打掛姿になりました。

そこには吉祥文様が描かれ、健康や長寿の願が込められていたのです。



写真10 参殿の者御引見の節等の装い (松島由佳)



近年、人口減少や人間関係の希薄化がすすみ、そこへ電子メールやソーシャルメディアの普及によって、年賀状の発行枚数が減少しているそうです。

今後はますます減っていくことが予想される年賀状ですが、現在目録化作業中の岩崎家文書には、明治から大正にかけて、アメリカから送られてきた年賀状が残されています。ご紹介しましょう。

◇和歌山県と移民



写真1 西亀之助 (『和歌山県移民史』より)

和歌山県は、明治から戦後まで、多くの移民を送り出したことで知られています。特に現在の紀の川市池田や田中、和歌山市西庄、美浜町三尾や串本町が移民村としてよく知られています。紀三井寺村からも多くの移民を輩出したことは、あまり知られていません。

右の写真1は、紀三井寺村出身の西亀之助です。亀之助は、安政五年(一八五八)に生まれ、明治二十一年(一八八八)西脇野村出身で先に渡米していた人からの

情報を得て、アメリカに渡ったといわれています。当初はサンフランシスコ(以下「桑港」)郊外で農業に従事していましたが、同二十三年(一八九〇)からは桑港で下宿屋を営みました。

以後、万国博覧会の開催をきっかけとして、息子の保羅とともにシカゴへ移り、活躍していましたが、明治四十年(一九〇七)頃に帰国、昭和二年(一九二七)に没しました。

亀之助の成功を知った人々は、後に続けと渡米し、亀之助活躍の噂は、日高郡稲原村の造木佐八の耳にも届きました。和歌山県からの移民は、漁業関係者が有名ですが、農村からも多くの人々が移住していたのです。

年賀状の宛て先であった岩崎家は、当主の富三郎が明治十八年(一八八五)以降、紀三井寺村会議員を歴任し、同三十四年(一九〇一)には村長に当選していることから、渡航者とは事務手続きや餞別を贈るなど、公私にわたる付き合いがありました。そのため、同村出身の西親子連名による年賀状が伝わっているでしょう(写真2)。

◇岩崎家に届くまで

はがきに押された消印から、いつ・どこから送られてきたものがわかります(写真3)。消印から確認できた集配局と枚数をまとめて一覧にしたのが左のページの図1です。日本と北米との玄関口である、桑港が最も多いのは納得ですが、同数でバカビルという場所がありました(後述)。

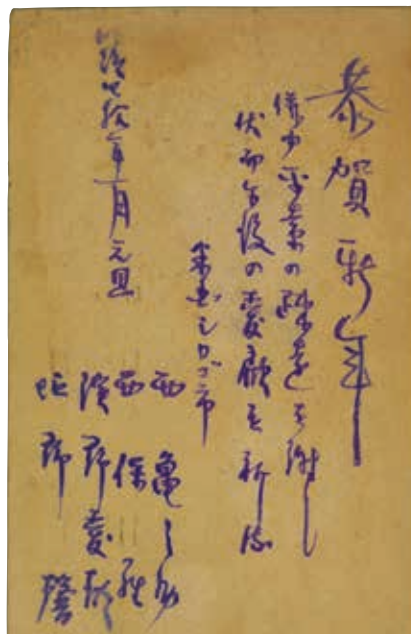


写真2 西親子ほかからの年賀状

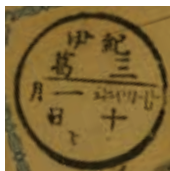
現在桑港と日本の間は、航空使いわゆるエアメールで送ると通常であれば十日ほどで到着するようですが、当時は船便しかなかったため、到着まで三週間から一ヶ月を要しました。

年賀状の役割というのは、本来対面して年始の挨拶をすべきところ、書状で代弁したものです。現在では元日に届くよう、年内に投函するのが一般的ですが、当時は元日を過ぎてから年賀状を送っていました。消印を見ると、郵便事情を考慮して早めに投函する人、従来通り年が明けてから投函している人に分れ、消印から発信者の性格が垣間見えます。

年賀状の発信者は、連名もあるため三四名、延べ一一人に上ります。もともと枚数が多いのは、西長左衛門という人物からのもので、一通ありました。次は七通の塩野馨、西織之助、宮本弥兵衛という人たちですが、彼らの履歴についてはよくわかりません。岩崎家と何らかのつながりがあったのでしょうか。



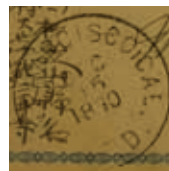
写真3 はがきの消印



④紀伊三葛 (明治)24.1.10



③横浜 1891.1.8



②サンフランシスコ 1890.12.15



①ウィンターズ (1890).12.15

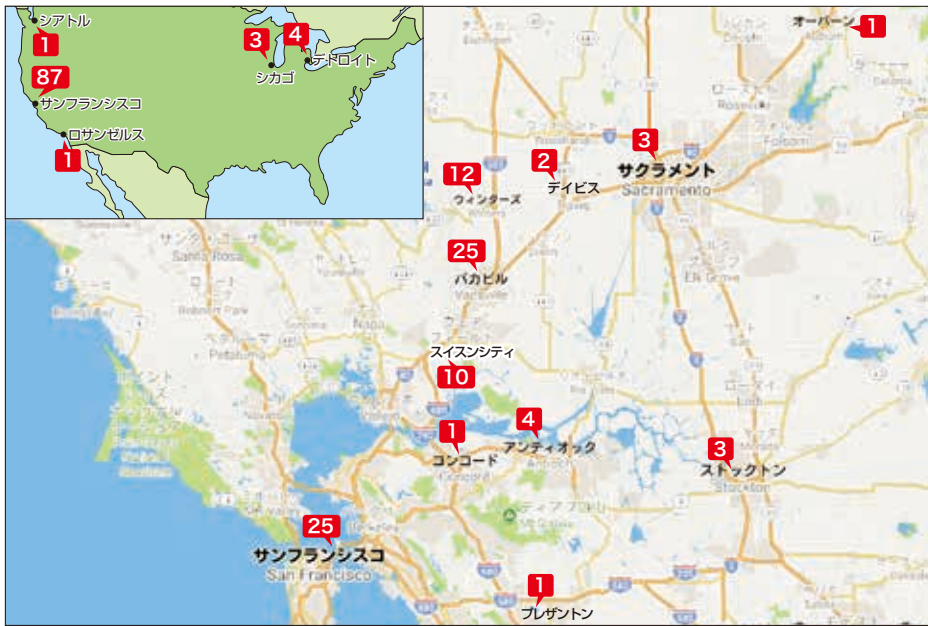


図1 アメリカ各地とサンフランシスコ近郊  
都市名についた数字は岩崎家に届いた年賀状の枚数

『和歌山県移民史』に、「(東洋物産商會の)支店勤務としては山崎源作、中原洋造の兩人に経営を一任」とありますが、岩崎家に届いた山崎源作からの年賀状のうち、明治二十四年(一八九二)のみウィンターズ(写真3)、同二十七年(一八九四)〜三十七年(一九〇四)に届いた五通の消印は、いずれも「San Francisco」となっていることから、普段は桑港にいたのでしょうか。

て、相川は同二十九年(一八九六)桑港に東洋物産商會を開設し、日本人向けの食料を扱う支店をバカビルに設けています。

◇北米での暮らし

明治二十八(一八九五)に桑港の日本領事館が調べたところによると、桑港を中心とした北部カリフォルニアに約四五〇〇人の日本人が在留していました。北米における移民者の職業は、ほとんどが出稼ぎ労働者で、農業つまり、開墾、果実類の栽培や収穫を主とし、農業以外では、鉄道建設、製材、炭坑、缶詰製造などに従事していました。そのほか、日本人向けの商店や料理店の経営者とその

従業員、家内労働に従事しながら修学する人などいました。

バカビルは、桑港からおよそ87キロ離れた土地で、明治二十年(一八八七)高知県人三名が進出。その三年後、和歌山市出身の相川直之助の移住をきっかけに、多くの和歌山県民が果樹栽培の盛んとなったバカビルに移り住んでいます。

明治二十八年には、四五〇人の日本人が果樹園での小作労働を中心に従事しており、増加する日本人移民に対し

◇サンフランシスコの本屋さん

余暇の娯楽として、また故国の情報収集のため、あるいは実用的な教育や修学を目的として、北米日系移民のあいだでは、日本語で書かれた新聞や雑誌・書物が流通していました。

なかでも、桑港の青木大成堂は、愛媛県出身の青木道嗣が、明治三十五年(一九〇二)に書籍文房具店を設立したのがはじまりで、出版業も兼ねていました。雑誌『宇宙』や、実用的な書物を刊行するかたわら、絵はがきの販売や日本



写真4 震災前のサンフランシスコの街並みの絵はがき

の新刊物の取次ぎ販売をおこない、店は繁盛していたようです。こうして、順調に発展を遂げていた日本人移民と桑港でしたが(写真4)、明治三十九年(一九〇六)四月十八日早朝(現地時間)、大地震に襲われます。市街地では多くの建物が倒壊、その後発生した火災によって壊滅的な被害を受けました。この時、青木大成堂も延焼しましたが、

現在も日本人街として賑わう一角でいち早く再開。震災の翌年には年賀状を発行しており(写真5)、短期間で急速に復興している様子がうかがわれます。絵はがきの左奥には初夢の縁起物である富士山、その手前には雄大に広がる太平洋が描かれ、年始のめでたい雰囲気演出しています。



写真5 青木大成堂の絵はがき

拡大

◇伏して爾後の愛顧を祈念

年賀状の文面は、現在とほとんど変わりありません。おおよそ、「日頃の疎遠を謝し、以後の愛顧を祈念する」といった内容です。皆様もどうぞ、良き新年をお迎えください。

(砂川佳子)

\*参考文献\*

- ・富本岩雄「在米和歌山県人発展史」一九二五年
- ・「和歌山県移民史」一九五七年
- ・日比嘉高「北米日系移民と日本書店―サンフランシスコを中心に―」『立命館言語文化研究』

平成二十九年 古文書講座Ⅰ

七月から九月にかけて、古文書講座Ⅰを開催しました。

今年の題材は、高野山寺領であった現紀の川市荒見の紀州藩地主北家に伝わった文書です。古文書講座Ⅰでは、その中から、異国船の到来や天誅組の変など、幕末の動乱の中で北家がどのような行動をとったのか、高野山寺領に住む紀州藩地主という特殊な立場に着目しながら、遊佐教寛研究員がわかりやすく解説しました。

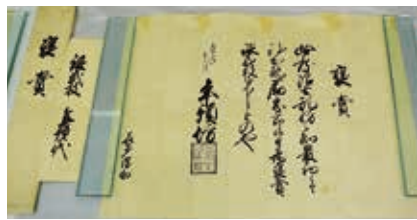
各回の講座内容は、次のとおりです。

<b>高野山寺領地主北家文書 (上)</b>	
<b>入門</b>	
<b>第1回</b>	最初より心配いたし 7月29日 (土)
<b>第2回</b>	御用の儀これ有り 8月5日 (土)
<b>初級・中級</b>	
<b>第1回</b>	貴方はいかが候や 8月19日 (土)
<b>第2回</b>	舟渡し小屋へ向け 8月26日 (土)
<b>第3回</b>	抛 <small>よんじろ</small> 無く 9月2日 (土)

「入門」には、延べ二二一名、「初級・中級」には、延べ一九三名の出席がありアンケートでは約八割以上の方から「興味深くおもしろかった」との回答をいただきました。

「入門」アンケート (抜粋)

・住んでいる県での歴史に触れられ、なおかつくずし字の基礎もすべて充実している講座です。遊佐先生のお話が面白くひきこまれます。



・文書の組み立て方や文字がどうしてそのような形で書かれるようになったのかが少しわかるようになった。  
・紙質の違いが如実にわかる展示をしていただき、大変興味深く古文書を見せられました。

「初級・中級」アンケート (抜粋)

・文そのものもだれがだれに話しているかとか、敬語などわかりにくいところを説明してもらえてよかったです、歴史の中に位置づけて解説されたのでおもしろかった。当時の緊迫感が伝わるように話して下さって、とても興味深かった。

・高野山寺領のこと、地主の立場などわかりやすく、おもしろく、お話しくださいって当時の風景が目前にひろがる様でした。



文書館の利用案内

■ 利用方法

◆ 閲覧室受付にある目録等で必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。



◆ 閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。  
◆ 複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

■ 開館時間

◆ 火曜日・金曜日  
午前10時～午後6時  
◆ 土・日曜日・祝日及び振替休日  
午前10時～午後5時

■ 休館日

◆ 月曜日 (祝日又は振替休日と重なるときは、その後の平日)  
◆ 年末年始 12月29日～1月3日  
◆ 館内整理日  
・ 1月4日  
(月曜日のとときは、5日)  
・ 2月・12月 第2木曜日

・ 特別整理期間 10日間 (年1回)

■ 交通のご案内

◆ JR和歌山駅・南海電鉄和歌山市駅からバスで約20分  
◆ 和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分



ホームページアドレス  
<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/>

和歌山県立文書館だより 第50号

平成29年11月30日 発行  
編集・発行 和歌山県立文書館  
〒644-1100 五丁  
和歌山市西高松一丁目七三三  
きのくに志学館内  
電話 〇七三-四三六-九五四〇  
FAX 〇七三-四三六-九五四一  
印刷 株式会社ウイング